

東大見学会レポート

今回の東大見学会の1連の流れに沿って、それぞれの企画について説明していきたいと思う。

企業訪問では、共同通信社を見学した。日本そして世界の情報が日本で一番速く届く場所だ。1日に届く情報量は新聞70ページ分に相当する。新聞の記事の多くは実は共同通信社が配信したものをそのまま載せている。テレビ局にも情報をいち早く配信し、そしてテレビ局側でそれを分かりやすく作って私たちに届いているのだ。また、遠洋漁業の漁船は共同通信からの直接のFAXのみを頼りにしている。

私たちに仕事を説明して下さった方から、幾つか有名なニュースの時の様子を教えてもらった。例えば、オリンピック招致で2020年が日本になったときや、ノーベル物理学賞を日本人が取った時のことである。特に、印象的だったのは高倉健さんが亡くなったときのエピソードで、文化部の職員の一人在吹き抜けの階段で階下の編集部に大きな声で「高倉健が死んだぞ!」と直接伝え、そこから即座に各新聞社テレビ局に配信され号外やテロップとなって国民に迅速に伝わったというものである。そのような日本全国に衝撃を与えたニュースが目の前にあるフロアから発信されているのだと気付くと感慨深いものがあった。

また、どのような人間が向いているのか質問してみた。まず、一つ目に好奇心がある人。二つ目に疑える人。これらは予想通りで、やはり記者には必要な要素であった。三つ目に信頼関係を作れる人。四つ目に謙虚な人。これは意外だった。取材先では、仲良くなり何回も接触し信頼を厚くし、そして情報を聞き取る。実際、クセのある記者も多いようだが、人格が言い方が仕事になるのだ。

私は、将来どちらかというより記者というよりは情報を編集し発信するがはに就きたいと思っているが、このような情報の最先端で働く姿を勉強できて貴重な体験となった。

三菱商事でのディレクトフォースでは、日本の超エリートの方々の生き方を学ぶことができた。

まず、日本と海外との違いについて。一番よく言われていたのは、外国人と話すときは日本人と話すときのように行間を読んでもらうことは考えず、意見はハッキリ言わなければならないということだ。そのようにすれば、多少発音などがおろそかで

も言いたいことは通じるそうだ。日本人が比較的自分の意見を言うのが苦手だと言う点は、やはり事実だったようだ。また、海外では日本に比べて健康志向は高まりつつあるがローカルな所ではあまりないことや、肉は作りやすいため安く野菜は高めなど、自分たちのイメージ通りのことも確認できた。印象的だった話しは、海外は日本に比べて家族との時間を大切にし休みを重視することであった。海外の支部で働いたとき残業をしているのは日本人だけであったことや、女性社員が子供を横に置いて仕事をしていたところを目の当たりにして驚いたそうだ。仕事の量や女性の労働環境については日本より優れていると考えられる。このような海外事情を教えてくださいました方は、「知ることをやめない」ことが大切だと私たちに教えて下さった。そうすればどんな場所でもやっていけるそうだ。確かにこれは勉強と言うものの原点と言えるかもしれない。

次のディスカッションでは、様々な私たちの生活のためになる話が聞けた。特に重要な要素が2つあった。1つ目は「今は何も恐れずにいろいろなことに取り組む。そして、失敗から学ぶこと」。これは勉強にもスポーツにも共通する。新たに学んだ技を試すことや、復習の大切さもこのことだと思う。2つ目は「何かに打ち込む。そしてその一生懸命やる姿を見せることが大切である」。これは、勉強にも当てはまるが、特に部活動に当てはまると思う。実際、私のいる部活でもまだそこまで強くなくても一生懸命休憩時間にも1人で練習してる人がいる。その人には僕も他者も、強さとは別に尊敬の念を抱いていて応援したくなる。私は、決して練習はサボらず、積極的に先輩に指導を頼むようにしている。しかし、彼のように休憩時間まで使うほど努力できていない。この話を聞いて、部活に対する気持ちを一新できた。

またこれは余談であるが、三菱商事の方々は皆俳優のようだったと思える。これはただの外見的問題ではない。彼らの力の抜けた笑顔から、そのエリートである自信が感じられた。私もこのような人間に将来なればと、切に思った。

OB懇談会では、今自分たちが直面している問題を直接聞くことができよかつた。私は部活動などの諸活動に時間がかかり勉強に十分時間を取れない事を聞いてみた。どの先輩も部活動には一生懸命取り組むべきだと言っていた。もちろん、部活が勉強からの逃げ場となっているわけではないのであれば、私は勉強への意欲はあるのでそこは問題なかつた。意外にも、先輩たちの私たちの頃の勉強時間は、今の私たちとさほど変わりのないものであつた。私は勉強時間に非常に劣等感を抱いていたため、それは希望の抱ける話だつた。しかし今の自分に危機感を覚える話もあつた。目標は早く高く作れというものである。早期の勉強は良い成績につながり、それが自信になり、さらなる勉強への意欲を生むとのことである。先ほども記した通り、現実的に難しい壁はたくさんあるが、できるだけこの教えに近づけるようにしたい。

もちろん勉強法についても質問した。先輩によると、自分が心地よいと思える勉強法を作り、自分なりの信念を持って取り組むと良いそうだ。私は将来の目標があり志もあるので、それを無駄にせず十分に活かしたいと思う。また、「とりあえず東大目指せ。」という話しもあつた。実際そのように考えるのは勇気があることだが、特にこれと言う大学にこだわっていない私からすると、少し興味のある話ではあつた。でも、まだ自分には不可能なくらい高い壁のように感じる。

東大オープンキャンパスは非常に地味なものであつた。私は将来メディアの仕事に就くつもりなので、文系のみ見学した。最初に安田講堂の中で法学部、経済学部、文学部の説明を受けた。意外と人が埋まってなかつたのが印象に残っている。

東北大と比べると本当に質素だつたと思う。例えば、一番最初に私と友人は法学部を見学したいと思い、一つの4階建ての建物がに入った。確かに研究室も幾つかあつたが人一人もいなかった。静寂につつまれ、不気味なほどだつた。また、立派な外見の図書館があつたため入ってみたが学生のみで私たちは入れなかつた。ちなみに、東北大の方は、研究室は見学者と説明する学生で賑わい、図書館は開いていたそうだ。

東大の敷地内にある建物のほとんどは赤いレンガ造りを意識したもので、散歩しているだけでその威厳を感じられた。また、安田講堂を前にした時はかの有名な安保闘争の時の光景を思い出した。そして講堂の中も博物館以上に歴史を感じさせるものであつた。しかし、オープンキャンパスで必要最低限のことしかしないところは、安定して受験生を獲得できる自信の表れではないだろうか。このような感想を、ちょうど1年前我が二高のオープンスクールでも抱いたことを思い出した。

この東大見学会全体を通して、これからの生活の意識を高くさせるものが多かつた。OBの先輩方、エリート、世界の情報を動かしている方々、その偉大なる先輩方の教えを時間がなくて苦しんでいる今であるからこそ少しでも自分の糧にしたいと思う。